



情報・知識・サービス

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 務 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/11560

情報・知識・サービス

総合情報センター所長 金子 務

知識とは何かは、古代からの大きな問題であった。プラトンは『テアイテトス』の中で、知識を鳥籠の鳥に例えている。その中には青い鳥も赤い鳥も黄色い鳥もいろいろ飛んでいるのだが、「知っている」ということは、自在に目的の鳥を捕まえて取り出すことができるのでなければならない、とした。この鳥が情報なのだが、頭につまっている情報も的確に取り出せて、初めて知識といえるというのは、確かに卓見である。

ここではもう少しこの比喻を現代に合わせて考えたらどうか、と私は思う。実は鳥籠は一つでなく、多数あり、多重になっているのではあるまいか。しかも鳥籠は永久不変でなく変えられ得るものなのではないか、つまり鳥籠というよりもさまざまな網み目をもつ投網と考えたほうがよいのではあるまいか、と。鳥という情報を取り出すときの仕掛けるべき網の種類がいろいろあって、それを選択するにも知識がいるのだとしたらどうだろうか。つまり知識というのは、「鳥+網」、すなわち、「情報+仕掛け」とみるべきなのではないか、と考えるのである。

とすれば、わが総合情報センターは、鳥という情報を第一に蓄積しなければならないのは当然であるが、第二に仕掛けとしての網もいろいろ用意しなければならない、ということになる。本学の蔵書数は昨年100万部を突破し、文部省の学情センターからも必要な書誌情報を所内の端末から得ることができる。インターネットで世界に触手を延ばすことも一部では可能である。つまり鳥たちは原則的にいえば、世界中から捉えることができるようになっていくだろう。とすると、問題はむしろ網の側にあるのかもしれない。どういう網を打つかというハードの問題と、どうように投網するか、というソフトの問題がそこにはあると思われる。

こういう仕掛けのハードとソフトのなかで、本当に難しいのはソフトなのだと、私は思う。これは、各専門領域で培われている研究方法や、問題設定者の資質に待つ部分が大きく、一概に提示できる性質のものではあるまい。それが学問の奥深さなのであって、これを総合情報センターに求めるのはどうやらお門違いになろう。センターとしては、さまざまな投網へのアクセスを用意すること、あるいはそれへのガイドになり得るものを準備しておくことが重要なのであろう。

情報化社会が叫ばれてからすでに久しい。かつては、C&C (computer and communication)とかニューメディアとかいわれていたものが、このところすっかりマルチメディアにとって替えられた。といっても実体が本質的に変わったわけではなく、情報処理技術の高度化と結合化・統合化、ソフトウェアの整備、および通信手段の大容量化・高速化につれて、名が変わっただけという側面も強い。

一般に、情報通信の目的は、限られた時間に良質の情報を大量に送ることにある。そのためには二つの方向がとられてきた。一つは大量の情報を送る光ファイバー等による通信路の構築、もう一つは、文字・図形・画像・音声など送りたい情報の品質を損なわずに、できるだけ情報量を小さく圧縮し、かつ有用なメディア間の変換方法を工夫すること、である。こうして遠隔地にあるコンピュータ同士を相互に結んで資源と資産を有効にかつ自由に利用しようということから、コンピュータ・ネットワークが構築されるようになった。現在、LANという企業や大学の区域内におけるコンピュータ網の整備が進みつつある。大阪府立大学においても、一部では実用化してい

るが、全学的な構築はいま検討中である。情報化社会をリードしているアメリカでは、遍在(ubiquitousness)コンピュータ環境社会、すなわち、いつでも、どこでも、どこへでも、端末のパソコンからサブネットワークを介して、国レベルを超えた高度情報ネットワークシステム「インターネット」に繋ぎ、それによってアメリカ国内はもとより全球的に情報が飛び交う情報化社会の構築をもくろんでいる。いわゆるスーパーハイウェイ構想である。遅かれ早かれ、日本もそうならざるを得まい。

本学の総合情報センターは、このようなシステムに積極的に加わる方向にあるが、そのような世界システムにおいてはやがて、情報の収支も問題になってくるだろう。受け取るべき情報が発信すべき情報よりも少なすぎるというのが、現在でも見られる日本情報事情なのだが、大阪府立大学の発信情報を増やす努力は全学的な協力があって初めてできることでもある。

情報とは何かといったら、クロード・シャノン流に言えば、「ビット」で測定できるものである。ある質問をして、イエスカノーか(1か0か、と考えてもよい)で答えさせたら、1ビットの情報を得たという。昔あったクイズ番組「20の扉」は、20の質問をして有名人を当てる遊びである。イエスカノーかの問を20回繰り返すのだから、20ビットの情報で当てる、 2^{20} =約100万ということで、有名人の母集団が100万人を上回ることがないから、当たるのである。こういうビットの思想は、世界を基本的に二元的、対立関係で掴めるという立場である。これは鋭利な手段になるが、そのため知識構造の単純化にも繋がる側面をもつことにも、心しておく必要がある。「行間を読む」とか、「言葉の背後の意味」などという認識の含みが消え去って、すべて明示化された情報のみで組み立てられたホワイト・ボックスが、ビット的知識の特徴だからである。それは記号論理学の骨格をもつから強固であり、強力である。さらにはファジー論理やエキスパート・システムなどで曖昧さを含む境界領域すら探索されていることも、よく承知している。しかしビット思考は血の通った人間には困る強情さと脆さをも持つ両刃の知識であることも否めない。直観的暗黙的な知の大海に、分析的明示的なビット知がいわば氷山の一角のように浮かんでいる、というのが、私の実感である。

最後にアインシュタインが知識と図書館について詩を書いているので、紹介しておく。

知識は重い負担にならない —

そう信じている人は、大変な思い違いをしている。

古くさいガラクタで一杯になった人は、

滅多に新しいことを思いつけなかった。

頭は空っぽにしておくほうがいい。

知識のためには図書館がある。

そこでなら、いつだって知識が君のために待ちかまえてくれるし、

君が行くまでは口をつぐんでいてくれるのだから。

ここでいう知識はいままで文脈でいえば、情報というべきかもしれない。情報を活かすも殺すも、空っぽにしておいた頭という仕掛が問題になることを、アインシュタインも言いたかったのであろう。